

校長室から (NO. 5)

「授業」と「感化」について考える

本校は、今年度、平成 30 年度学力向上市町村教育プラン研究委託事業拠点校の指定を受け、「とやま型学力向上プログラム」に基づいて、「確かな学力」の育成のための実践研究を推進してまいります。

そこで、今年度の研究主題を「考えを広げ、深める授業づくり～子供の対話力・教師の質問力の高まりを探る～」とし、より確実に知識及び技能を習得できるようにすることに重点をおいて研修を進めたいと考えています。

その研修の一環として、6月4日(月)は、「支援型訪問研修」を開催いたしました。当日は、西部教育事務所、市教育委員会、市教育センターより、諸先生方をお迎えし、全教員が授業を公開しました。この日は特に、授業の在り方について研修する一日となりました。

それまで、本校の教職員は、熱意をもって、時には時間を忘れ、教材研究をし、指導計画を立てることに努めていました。その結果として、本授業のねらいとする姿に子供たちが達していたか、学習を促進するために適切な発問がなされていたかなど、厳しく自己評価をすることになります。(かつて、私なんかは、授業を公開する度に、後悔するばかりでした)幸いなことに、この研修は、一人一人の授業に対し、貴重な指導助言をいただき、多くの気付きをいただくことができました。

私たちの研修は始まったばかりです。自らの授業を振り返るとともに、実践を通し、掲げられている研究の視点が、いったい何を為すべきことなのかを明らかにしていかなければならないと思います。

もう一つ、忘れてならないことを書き添えておきたいと思います。授業に真摯に向き合うことの価値についてです。梶田叡一先生の著書「教師力の再興」の中の一節から

一人の先生の態度が、必ず子供の一人一人を感化するということを考えなければならない。「感化」は抽象的なことではなく、極めて現実的な問題である。しかし感化を意識してやっては感化にはならない。先生の、おのれを高めて成長していこうという態度自体が子供に影響をおよぼしていくのである。

